

第7章 平安京・中世京都の葬地と墓制

五十川伸矢

京都は千年の都であり、延暦13(794)年の平安遷都以降、その都市としての伝統は現在にまで至っている。その間、幾多の政治的文化的変転を遂げ、それが日本史の重要な画期を形造ったことはあらためて述べるに及ばない。この数々の変転は京都における葬地や墓制に対しても多くの規定を与えてきた。本稿では平安京から中世京都に至る歴史の中における葬地と墓制の展開について考えてみることにしたい。なお近年京都市内の発掘調査によって多くの墓が発見されているのでこれらを整理し、文献に示された古代・中世の葬地と墓制のあり方をこれに重ね合せて検討し稿をすすめる。

1 平安京・中世京都の墓

平安前～中期の墓の確実な発掘例は僅少であるが、右京三条三坊(図30-1)では10世紀ごろの木棺土塋墓が1基発見されている〔京文研80b〕⁽¹⁾。これは南北に長い1.9m×0.6mの掘形の中に木棺をおさめるもので、棺内には皮製の折敷の上に化粧道具とみられる漆塗りの皿・合子、毛抜き、和鏡が副葬されていた。遺品の性格からみて被葬者は貴族と考えられる。この土塋墓の周辺に墓はまったくなく、その南東には平安前～中期の建物跡が存在する。

鎌倉時代にはいと京の内外で多くの墓が形成されるが、中世以来の葬地として知られる化野念仏寺境内(図30-2)からは、鎌倉前期の古瀬戸灰釉四耳壺が発見され蔵骨器と考えられている〔乗安76〕。また鳥辺野の一郭と考えられる東山区渋谷(図30-3)からは鎌倉初期の蔵骨器と思われる古常滑三筋壺が出土している〔田中勝73〕。いずれも京外の山麓の地域に位置し、蔵骨器が粗製の日用雑器ではないことから、上流階層の人々のものであるう。

上記の例は蔵骨器の単独出土であるが、次に中世の墓が発掘調査されたものを列挙する。

京都西郊の双ヶ岡西南麓に位置した中世の墓地が常盤東ノ町(図30-4)で調査されている〔京文研77〕。ここでは横穴石室をもつ古墳の墳丘とその周辺に30基以上の中世墓が発見された(図29)。このうち鎌倉前～中期に遡る3基において、遺骸は木棺にほぼ南北に伸展葬され、そのうち1基では土塋内に石室を築き木棺をおさめるという丁寧な埋葬法をとっていた。また鎌倉末から室町時代にかけてのものは、頭部を西に木棺に伸展葬されたもの

1例(図28-1)を除くと、その大半は1m×0.6m程度の掘形をもち木製箱型の座棺に屈葬され、六道銭、漆器などを副葬するものであった。

常盤東ノ町遺跡の西南に位置する常盤仲ノ町遺跡(図30-5)にも中世の墓地が存在する〔京文研78b〕。ここでは鎌倉時代は、土壇内に礫を埋めた火葬もしくは直葬のものが6基あり、室町時代では、木棺に伸展葬もしくは直葬のものや、木製箱型の座棺と推定されるものが15基混在している。

さらに京都西郊嵯峨野古墳群に属する御堂ヶ池11号墳(図30-6)では、横穴式石室の本来の床面の上にもう1枚の床面が検出され、人骨、鉄釘と15世紀ごろの土師器が出土した〔京都大学考古学研究会71〕。これは明らかに木棺をとまなう中世の墓であり、横穴式石室に木棺をおさめるという点で、常盤東ノ町遺跡などの木棺土壇墓と異なる。また嵯峨野広沢古墳でも石室内から15世紀ごろの遺物が発見されており〔樋口61〕、同様の墓が存在した可能性がある。こうした横穴式石室が中世において埋葬の場として再利用される例は、近畿一円でもよくみられる現象である〔白石75〕。

現在の御所の北、同志社大学のキャンパス周辺は中世から近世にかけての公家屋敷、町寺の重要な遺跡が広がっているが、同志社女子大学図書館付近(図30-7)では室町後期の墓地が検出されている〔同志社調査会76〕。ここでは、その第3遺構面において室町後期と考えられる11基の土壇墓が発見された。そのうちには屈葬人骨の残るもの(図28-2)、六道銭を出土するものや備前・常滑焼の組み合さった大型甕棺などが存在する。墓壇は円形、楕円形など様々な形態を示し一定ではないが、ほぼ1m程度の長さをもつものが多く、遺体を伸展葬しうるものはない。また調査区からは多数の一石五輪塔が出土した。そのほとんどに戒名と年号の銘文があり、これらが16世紀中葉から後葉にかけてのものであることが推定される。この周辺は室町幕府の花の御所にもほど近く、相国寺とも関連する地域であるが、寛永14(1637)年刊の古図によれば遺跡該当地に報土寺の寺地がみえるため、この寺もしくはその前身に付属する墓地と考えてよいだろう。このほか同志社大学構内では、烏丸今出川交差点付近、今出川寺町西入ルの同窓会館・幼稚園付近でも土壇墓が検出されている。

次に京都大学構内周辺は、古代以来神楽岡葬地として著名であるが、第4章で報告したAT27区(図30-8)の土壇墓のほか、医学部構内AO18区(図30-9)では2基の墓が検出されている〔京大埋文研79〕。AO18区の墓は室町時代のものであり、常滑産の甕や瓦器羽釜をとまなう。この土壇墓の周辺には、土塁、建物、井戸、土器溜などの遺構が散在してお

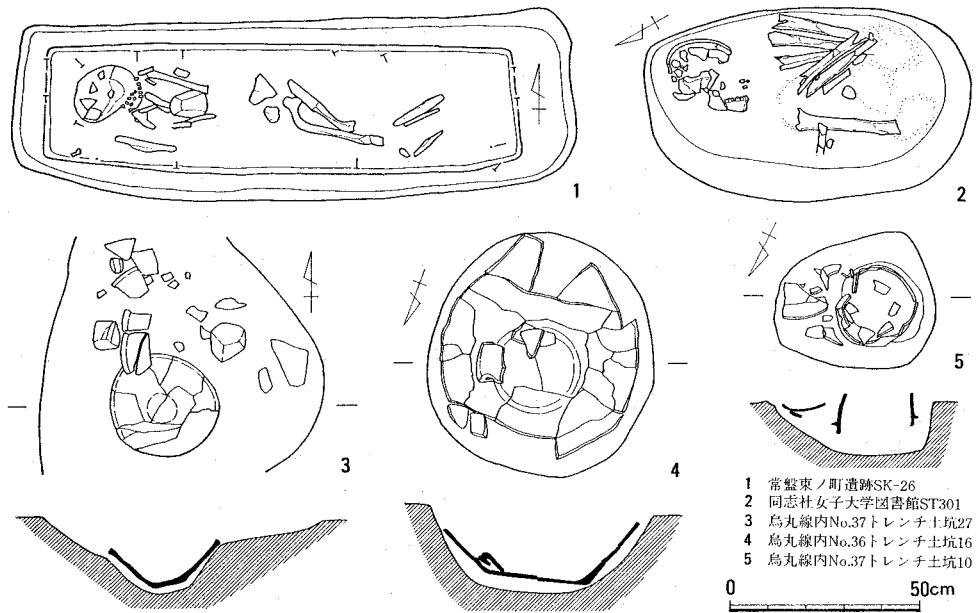


図28 中世墓における葬法



図29 常盤東ノ町遺跡の中世墓地

り、墓が住屋のすぐ脇に作られたことが判る。また北部構内B E29区(図30-10)では鎌倉前期ごろの火葬塚が発見されている〔京大埋文研79〕。

烏丸六条から七条にかけての東本願寺前の一帯には中世の墓地が存在し、その範囲は西は東本願寺西側、東は枳穀邸西部まで及ぶ可能性のあることが知られている〔烏丸調査会76a・80, 京都市文化観光局文化財保護課80〕。特に東本願寺前の烏丸通り一帯(図30-12)では稠密な墓の分布がみられる。ここで検出された鎌倉時代の土壙墓は掘形が円形、楕円形、隅丸方形などの皿状の土壙をなすものが多く、直葬の形態をとったものと考えられる。ところが室町時代のものには、前代のものと類似するもののほかに須恵器すり鉢、常滑産の甕、瓦器羽釜・鍋などを蔵骨器として利用するもの(図28-3~5)が出現する。また土壙墓の数量も増加する傾向にある。この墓地は平安末期の建物群が廃絶した跡地に形成されたもので、墓地の展開によって七条坊門小路と推定される道路も廃絶するらしい。

また烏丸中立売下ル御苑町(図30-11)でも烏丸線内遺跡調査会の調査したNa23・Na42トレンチにおいて、室町時代の土壙墓群が発見されている〔烏丸調査会75・76b・80〕。ここでは瓦器鍋・羽釜を蔵骨器とするものがあるが、直径1mの不整形円形をなす土壙で火葬骨を直接埋納したものもある。

下京区塩小路通新町上ル付近(図30-13)では総計400基に及ぶ室町時代の墓が検出されている。埋葬形態には瓦器羽釜・鍋、常滑産の甕、漆塗の容器を蔵骨器にするもののほか、火葬骨をそのまま埋納する形態のものも存在し墓壙上に集石のみられるものもあった。

また東山区三十三間堂東隣の法住寺殿跡(図30-14)では、平安末期の武士の墓が発見されている〔古代学協会79〕。これは3.0m×3.3mの掘形の底に鍔が裏返しに敷き並べてあり、兜や弓矢も出土した。兜には古式の鍬形が伴い大将級の人物と推定されている。京都における中世の武人の墓と確言できる唯一の例である。

僧侶の墓としては、東山区東福寺塔頭の永明院開山堂(図30-15)で、東福寺第六世円鑑禅師(延慶1(1308)年入寂)の墓がみついている。葬法は明らかではないが、切石による0.8m四方の石室を作り、元代の白磁香炉を副葬していた。また同寺塔頭竜吟庵開祖東福寺第三世大明国師(正応4(1291)年入寂)の墓(図30-16)も0.9m四方の石室であるが、ここでは高さ10.4cmの銅製円筒形の蔵骨器が出土した〔文化庁監76〕。

2 葬法の変遷

前節で述べたように、平安京・中世京都の墓には、その葬法に様々な形態を示すものがある。そこでこれらを整理し葬法の変遷を跡づけてみることにしたい。

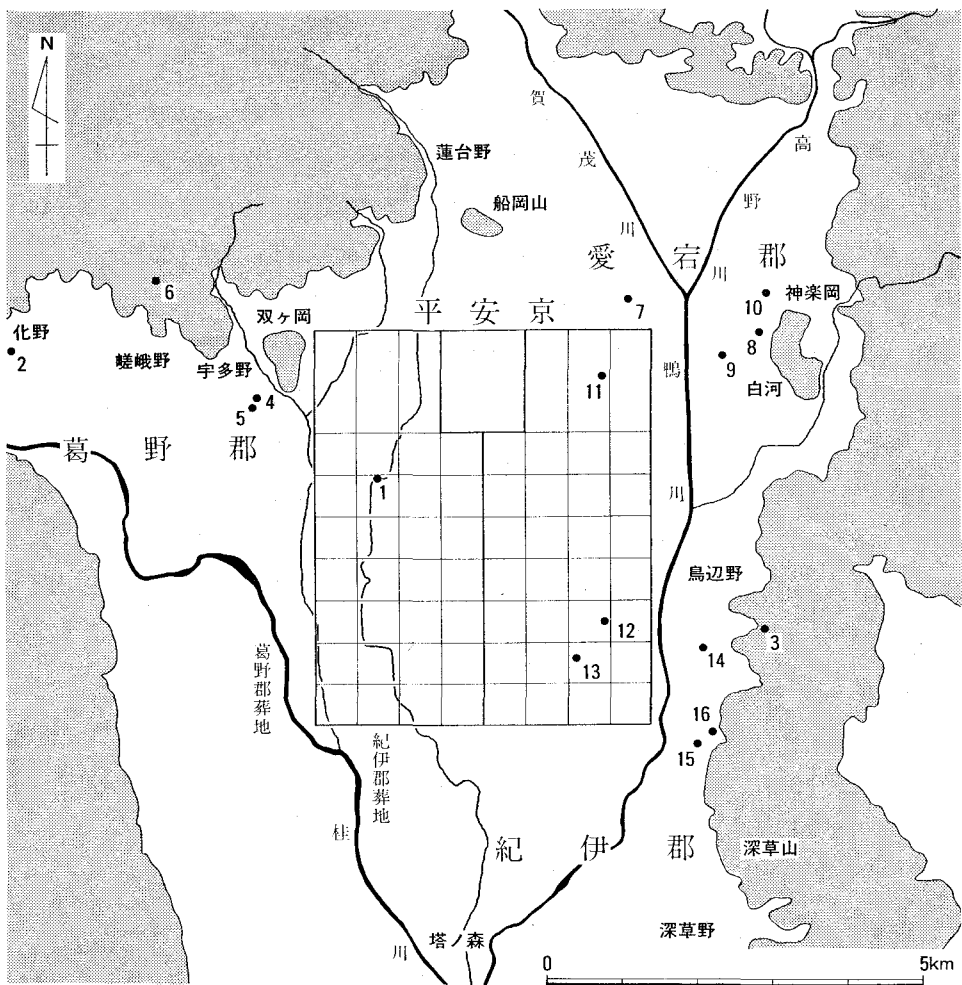


図30 平安京・中世京都の葬地と墓

古代・中世の葬法には土葬と火葬とがあるが、土葬には直葬と木棺におさめるものに分⁽²⁾けられ、火葬には遺骨をそのまま埋納するものと蔵骨器に納入するものに分けられる。

このうち直葬は最も簡便な葬法であり、同志社女子大学、常盤仲ノ町、東本願寺前、京都大学A T27区などでみられる。人骨の遺存するものは少数であるが、屈葬の形態を示すものがある。これは中世において最も普遍的な葬法であったと考えられる。

鉄釘を用いて組み合わせた木棺に伸展葬を行なう寝棺の形態は、古墳時代以来の伝統をもつものであるが、右京三条三坊、京都大学A T27区、常盤東ノ町、常盤仲ノ町、御堂ヶ池11号墳などに例がある。このうち古いものは10世紀の年代を示すが鎌倉時代に続き室町時

代にはいつてやや減少するようである。この寝棺の主軸方向は、常盤東ノ町のやや時期の降る1例や御堂ヶ池例を除けば、ほぼ南北にとるのが通例と考えてよいだろう。副葬品の位置から考えて遺骸が北枕であったと推定されるものもある。『北野天神縁起絵巻』には夜陰に葬送を行なう情景が描かれているが、担い棒によって2人の男にかつがれた柩は、こうした木製の寝棺であったであろう。これに対して木製箱型の座棺の形態をとるものは常盤東ノ町、常盤仲ノ町にみられ、寝棺のやや減少する室町時代に盛行すると考えてよいだろう。なお桶型の座棺の出現は近世以降と考えられる〔京文研78b〕。

次に火葬は古くから天皇、貴族の間ではかなり普遍的な葬法のひとつであるが、彼らの墓の実体は明らかではない。⁽³⁾このうち死体を茶毘に付したうえ遺骨を施釉陶器などに納入するものは発見例が僅少であるが、京都市周辺では大津市坂本本町横川霊山遺跡の室町時代の墓地でも発見されている〔兼康78〕。これらの分布はやや東日本にかたより、京都周辺では施釉陶器の壺類は経筒として用いられた例が多いが、中世において普遍的にみられる葬法と考えてよいであろう。また金属製の容器に納入するものは、例が少ないが僧侶など特定の階層に限られるようである。

日用の瓦器鍋・羽釜、須恵器すり鉢、甕などの雑器を蔵骨器として用いるものは、東本願寺前、京都大学AO18区、烏丸中立売下ル御苑町、塩小路通新町上ルなど、検出例は枚挙にいとまないほどである。これらの盛行するのは室町時代以降であるが、南都元興寺極楽坊でも、室町中期以降、瓦器羽釜を蔵骨器とする埋納による墓地の形成がすすみ〔元興寺仏教民俗資料研究所76〕、同時代的現象として把握してよいだろう。

蔵骨器をもたない火葬墓は、烏丸中立売下ル御苑町や塩小路通新町上ルなどにおいてみられるが、いずれも日用雑器を蔵骨器とする墓地の中に存在し、室町時代のものが多いと考えるとよいであろう。

以上、平安京・中世京都における葬法の変遷は、木棺墓については寝棺から座棺への変化、火葬墓では室町時代の日用容器を蔵骨器とするものの展開に注目すべきであろう。

3 文献からみた葬地と墓制の変遷

さて次に文献によって平安京・中世京都の葬地と墓制の変遷過程をたどってみよう。

大宝喪葬令皇都条に「凡皇都及大路近辺並不_レ得_二葬埋_一」という条文のあったことが『令義解』によって復原されるが、この皇都条は天皇の居る京師内とその周辺および諸国の大路(山陽道)の近辺に埋葬することを禁じたものであり、穢れを避け天皇と国家の威厳を高めようとするものであった。

延喜式諸陵寮式に記載された陵墓の所在地をみると、紀伊郡一深草、宇治郡一山科・小野・木幡、愛宕郡一鳥辺野・白河・神楽岡、葛野郡一嵯峨野・宇多野・大原野、乙訓郡一高島・石作・宇波多などで、いずれも平安京外である。また延喜式以降の陵墓所在地は、洛東の白河、鳥辺野や深草・木幡に集中し、室町時代以降では泉涌寺で火葬し深草の法華堂に火葬骨を納める例が増大する。もちろん陵墓の比定がかならずしも正しいとは限らないが、陵墓に関しては平安京の京外に設置するというのが原則と考えてよい〔和田76〕。

次に貴族の墓所であるが藤原氏一門は宇治木幡の浄妙寺に埋葬されていたし〔堅田65, 林屋57〕, 村上源氏の螢域は北白川丸山一帯にあった〔角田69〕。また五摂家の九条・一条家の墓地は東福寺境内にあり、古代貴族とその末裔はいずれもその墓所を京外に営むのを常とした〔和田76〕。

さて百姓の墓はどこに求められたのであろうか。長岡京時代の延暦11(792)年8月4日の禁制「禁_レ葬_ニ埋山城国紀伊郡深草山西面_ニ。縁_レ近_ニ京城_ニ也。」(『類聚国史』)や平安遷都3年後の延暦16(797)年正月25日の勅「山城国愛宕葛野郡人、毎_レ有_ニ死者_ニ、便葬_ニ家側_ニ、積習為_レ常、今接_ニ近京師_ニ、凶穢可_レ避。宜_下告_ニ国郡_ニ、嚴加_中禁断_上。若有_ニ犯違_ニ移_ニ貫外国_ニ。」(『日本後記』)から、紀伊・愛宕・葛野の3郡において百姓の伝統的な山麓あるいは家側の葬地に制限が加えられてゆくことが判る。これは喪葬令皇都条に基づくものであり、律令国家は遷都後いち早く葬地の整備を手がけたのである。これらの禁制が守られたかどうかは疑問であるが、承和9(842)年10月14日の勅に「勅_ニ左右京職東西悲田_ニ並給_ニ料物_ニ。令_レ焼_ニ斂嶋田及鴨河原等鬻體_ニ。惣五千五百余頭。」(『続日本後記』)とあるように庶民の墓地は河原に形成されていた。累々たる死体の山という情景から彼らの墓は墓壇を掘ってその中に埋葬されるようなものではなく、『餓飢草子』や『六道絵』にみられるように、藎や畳の上に横たえられたまま放置されるといった形状であったと想像される。貞観13(871)年閏8月28日の官符には、「定_ニ葬送並放牧地_ニ事。山城国葛野郡一処。在_ニ五条荒木西里六条久受原里_ニ、四至東限_ニ西京極大路_ニ西南限_ニ、大河_ニ、北限_ニ上件両里北畔_ニ。紀伊郡一処。在_ニ十条下石原西外里十一条下佐比里十二条上佐比里_ニ、四至東限_ニ路並古河末_ニ、西南並限_ニ大河_ニ、北限_ニ、京南大路西末並悲田院南沼_ニ。」(『類聚三代格』)とあり、百姓の葬地が京の外周地域に規定されてくるのである。おそらく当初の禁制が徹底せず、無秩序な墓地の形成に歯止めをかけようとするものであろう。

律令国家が京内に墓を作ることを禁じたのは、ひとえに屍のもつ穢れを忌み嫌い、これを避けるためであった。しかし9世紀中ごろには西市が廢れはじめ、10世紀なかばには慶

滋保胤の『池亭記』にみられるように、右京が荒廃し平安京が著しく変貌をとげると、屍に対するこうした観念も必然的に変化を余儀なくされてゆく。

天台宗において常行三昧と法華三昧は葬祭儀礼の中心であるが、法華堂への納骨は皇族貴族に広く受容され、長元9(1036)年、後一条天皇は天皇として初めて法華三昧堂へ納骨を行ない、石卒塔婆を置く墓堂が建立された。以後各代天皇が法華堂に納骨されるが、こうして寺院の中に遺骸を納めることが故人の冥福を祈る近道であるという考えが普及し石塔を墓標として建立する例が増えてくる。

また古い伝統をもつ陵戸制や平安初期に制定され、毎年12月末に陵霊祭祀のために陵墓に綵帛を奉る荷前制^{のきま}が定着してゆくが、こうした動きに促されて墓詣の風が確立してゆく。藤原道長は先祖の菩提を願い宇治木幡に浄妙寺を建立するが、これもそうした動きのひとつである。その参詣の対象は墓所を示す石卒塔婆であったが、やがて墓所と参詣所を拡大した墳墓堂という形式も生み出されてゆくのである。

またそれとともに葬儀の新しい担い手たちが出現する。末法思想は平安後期から鎌倉時代にかけて大きな影響力をもち新仏教発生の重大な要因となったが、浄土教の僧侶たちを生み出した。彼らは西方阿弥陀仏の浄土に往生することを念願した。このうち空也の流れをくむ人々は葬送に関与することにより、その存在を明らかにしていった。市井において念仏を唱えるところから彼らは阿弥陀聖、市聖と呼ばれたが、葬送の行列に立ち、あるいは葬送の場において葬儀に関与するのが11世紀以降一般化した。そして12世紀には単に葬送・埋葬の行列に参加するだけでなく、葬儀全般を執行するに至り葬式仏教の原形が成立するのである。〔田中久75〕。また新仏教が葬式法要に熱心であったのは、旧仏教にくらべ経済的基盤がなかったからであるが、葬儀をなかば職業とする人々が出現したという意味でも画期的な意味を持っている〔圭室33〕。

さらに平生業成を説く真宗においても当初は葬祭に重きを置いていなかったが、存覚、蓮如と時代が降るにつれて葬祭の比重をたかめてゆく。また庶民的仏教葬祭は浄土教を主軸とするが、武士層に浸透した禅宗なども14世紀以降に坐禅的なものから葬祭的なものに移行してゆくのである〔圭室63〕。

さて文治1(1185)年の鎌倉幕府による地頭設置、14世紀の南北朝の動乱、応仁1(1467)年に勃発した応仁の乱などの諸段階を経て、中世寺院の経済的基盤をなしていた荘園が漸次崩壊する。このような情勢に対し葬式法要が新しい経済源として注目され、遂に荘園に代って寺院経済の支柱として確立するのである。こうして近世の寺院の基礎的形態が出来

上るのが15世紀である。そして荘園の解体によって成立してゆく惣にむすばれた郷村の中に各宗派は食いこみ、庶民との間にも葬祭を通じた結合を深めてゆく。この新しい情況に対して、やがて江戸幕府は檀家制度としてこれを法制化し、封建支配の網に組みこんでゆくのであるが、京都においては秀吉の都市再編ともなう寺町の設置によって近世京都の母胎となる景観が形成されていったのである。

4 小 結

以上、平安京と中世京都の墓について発掘資料を提示し、文献による葬地と墓制の展開について、その大状況を把握した。そこで最後にこうした考古学的成果を文献の示す歴史的展開の中でとらえなおし位置づけてゆきたい。

まず平安京では、京域外周に接して庶民の墓があり、その外延の山麓一帯に天皇や貴族の葬地が広がるという墓域設定が為政者によってなされ、京内に埋葬することを禁じたが、10世紀には右京三条三坊の貴族邸宅の付近に墓が設けられている。これは京内にも墓を作るという中世のあり方の先駆をなすものとしての意義をもっており、京都大学構内AT27区SK4・SK5や常盤東ノ町遺跡検出例などとほぼ類似する墓の構造をもつ点においても注目されるのである。

葬地と墓制の中世的展開は、京内における本格的な墓地の形成という形であらわれてくる。そしてそれは東本願寺前の中世墓地にみるように、平安京から中世京都への景観変遷に対応して展開してゆく。また古代に形成された京外の伝統的な葬地は中世にも受けつがれ、宇多野、神楽岡、烏辺野、深草野などは数多くの文献にその名を残しているが、これらの地域においても常盤東ノ町・常盤仲ノ町の両遺跡にみられるように鎌倉時代にはじまる中世墓地の展開がみられる。こうして成立した京外における墓には前述のように京内にみられた10世紀の木棺土壙墓の系統をひく構造を示すものが多いという点で、前代の連続性を示していることも注目すべきであろう。

しかし室町時代に至ると京内外の墓制は著しい変貌をとげる。まず常盤東ノ町・常盤仲ノ町の両遺跡では木製箱型の座棺が出現した。もちろん前代の伝統を引く寝棺の形態をとるものも存在するが、嵯峨野においてはこれを古墳の石室におさめるものもあらわれた。また東本願寺前や塩小路通新町上ルなどの遺跡では、日常雑器類を蔵骨器とするものが存在するが、これは前代にはみられなかったものである。そしてそれらが、鎌倉時代の墓に比べて、はるかに量的に多く密集して墓地を形成するという点にこの時代の特色がある。こうした葬法の多様化と数量の拡大は14世紀以降の仏教界の葬式仏教化の結果生じたもの

であり、被葬者層の拡大と場所をとらない簡便な葬法の普及は、それ以前にくらべかなりの庶民の間にも墓の造営がすすめられたことを物語るものであろう。また京内外の各墓地において葬法のちがいがみられるのは、被葬者の生前帰属した宗派のちがいを示すものとも考えられるが、もしそうならば、諸宗こぞって葬式仏教化してゆく14世紀以降の仏教界の様相を如実に反映していると考えてもよいだろう。

さらに同志社女子大学構内では、小規模な土壙に屈葬するというきわめて簡便な葬法がみいだされるが、それが中世京都某町寺の寺域内の墓地と考えられること、被葬者名を記した墓石にみられるように庶民の間にも個人の墓を明示する風の成立していることからして、16世紀には江戸時代に通有の墓地の原形が明確に成立していたと考えてよいだろう。

上に述べたような中世の墓の変遷は、主として庶民の墓を中心とする展開と考えてよいであろうが、日常雑器ではない施釉陶器などを蔵骨器とする墓は、上層の特定階層の人々のものであろう。これらの発見例は数少なく、墓の実体は明確ではないが、京内においては目下のところまったく見いだせない葬法であることから、彼らの墓は永代京外の伝統的な葬地に営まれていた可能性が高い。

以上平安京・中世京都の葬地と墓制の展開について、現在知られる資料をもって考察を行なった。しかし墓地の形成・展開・衰亡という過程を追究することのできる良好な発掘例や報告はけっして多いとはいえない。京都千年の歴史の中における墓の生成発展を闡明化する日は、まだ遠いのである。

〔注〕

- 1 京都市埋蔵文化財研究所平尾政幸氏の御教示による。
- 2 遺骸を布などにくるんだだけのものもこれに含める。
- 3 それをうかがうものとして、京都大学構内B E 29区発見の火葬塚がある〔京大埋文研79〕。